様式第２号

平成２６年度　　独 創 的 研 究 助 成 費 実 績 報 告 書

平成２７年３月３１日

<table>
<tr><td>申　請　者</td><td>学科名</td><td colspan="2">保健福祉学科</td><td>職 名</td><td>教授</td><td>氏 名</td><td>村社　卓</td></tr>
<tr><td>調査研究課題</td><td colspan="7">高齢者の孤立予防に向けたソーシャルワークモデル開発</td></tr>
<tr><td>交付決定額</td><td colspan="7">28 万円</td></tr>
<tr><td rowspan="3">調査研究組織</td><td colspan="2">氏　　名</td><td colspan="2">所属・職</td><td colspan="2">専門分野</td><td colspan="2">役割分担</td></tr>
<tr><td>代表</td><td colspan="2">村社卓</td><td colspan="2">保健福祉学部　教授</td><td colspan="2">ソーシャルワーク論</td><td colspan="2">調査、データ分析</td></tr>
<tr><td>分担者</td><td colspan="2"></td><td colspan="2"></td><td colspan="2"></td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td>調査研究実績の概要</td><td colspan="7">本研究は、高齢者の孤立予防に向けたソーシャルワークモデル開発の基礎研究である。本調査研究では、孤立した高齢者に関与するうえで重要な位置にあるボランティアの共感力を分析対象として、その構造とプロセスを明らかにした。具体的には、大都市Ａ区において高齢者の孤立予防を図る「ほっと安心カフェ」事業を分析対象として、「ボランティアの共感力の焦点化と分散」の構造とプロセスについて、定性的調査（参与観察、インタビュー）及び定性的データ分析により明らかにした。

今回の研究成果は、以下の3点を明らかにしたことである。
１．良好な交互作用を継続できる要因の構造とプロセス
高齢者の孤立予防に関わるボランティア活動において、良好な交互作用を継続できる要因は、「共感の再構成を目指した共感の集中および制限と離脱」と表現することができる。「共感の再構成を目指した共感の集中および制限と離脱」とは、ボランティアが｛共感への集中｝と｛共感の制限｝により｛共感の再構成｝を行うことであり、｛共感の再構成｝は｛共感の制限｝｛共感からの離脱｝と相互関係にある。ボランティア活動の継続には、これまでの共感を「再構成する」ことが重要であり、そのため共感を「集中する」「制限する」「離脱する」機会が必要となる。福島は、活動頻度と内容選択がボランティアの共感疲労への耐性を高めると指摘している（福島2010）。本研究では、この「制限」に加えて「集中」の機会が必要となることを構造的に明らかにした。</td></tr>
</table>

調査研究実績の概要	そして、上記の成果を時系列で整理するならば、｛共感への集中｝は｛関与の調整｝により「今ここで徹底的に関わる」ことである。｛共感の制限｝は｛関与の限定｝により「今ここでの関わりを抑える」ことである。｛共感からの離脱｝は｛関与の分散｝により「今ここで関わらずに離れる」ことである。そして、｛共感の再構成｝は｛関与の確認｝により「未来に向けて関わりを再構成する」ことである。このことは、ボランティアの意識が現在志向から未来志向へと変化することを意味している。活動を継続できるボランティアは、時には「今ここで関わらずに離れる」余裕をもって、「今ここで徹底的に関わる」ことと「今ここでの関わりを抑える」ことを行い、「未来に向けて関わりを再構成する」のである。 **２．支援特性の構造とプロセス** 上記の良好な交互作用の継続を可能にする支援特性は、「関与の確認を目指した関与の調整および限定と分散」と表現することができる。「関与の確認を目指した関与の調整および限定と分散」とは、スタッフがボランティアへの｛関与の調整｝と｛関与の限定｝により｛関与の確認｝を行うことであり、｛関与の確認｝は｛関与の限定｝｛関与の分散｝と相互関係にある。ボランティア活動の継続には、これまでの関与を継続的に「確認する」ことが重要であり、そのためには関与を「調整する」「限定する」「分散する」支援が必要となるのである。 **３．ボランティア活動における「共感疲労」と「共感満足」** このような、良好な交互作用を継続できる要因および支援特性の構造とプロセスの提示は、対人援助における「共感疲労」「共感満足」の関係解明にも貢献するものである。 先行研究では「共感疲労」「共感満足」の構成因子として、対人関係を中心にそれぞれ4因子が提示されている（藤岡2008）。しかし、両者の関係は不明であった。本研究により、限定的ではあるものの、その関係は相互的であることが定性的データでもって確認された。 また、「共感疲労」「共感満足」の決定要因は、支援者の「感情表出」「自己援助」「資源活用」「明晰な内省力」「判断力」の5つである（Radayら2007）。本研究では、加えてボランティアの場合には、[目標の再設定][対象者理解の深化]の重要性が示唆された。 そして、援助者が「共感疲労」に至る過程は、Figlayによると「共感能力→共感応答→共感ストレス→共感疲労」であり（藤岡2008：318）、その要因として「長期間の曝露」が挙げられている。本研究では、この「曝露」を防ぐ共感の「制限」と共感からの「離脱」の内容と構造について、定性的データ分析により具体的に提示することができた。 最後に、「実践・研究への提言」について触れておく。 ボランティアの「共感疲労」および「共感満足」の視点からの新しい知見は、高齢者の「孤立死」問題に対応する予防的な対策、特に援助者へのサポートについて貢献できるものである。高齢者の「孤立死」問題は、近い将来、東アジア地域においても重大な社会問題となることが予想される。本研究は、日本では、ソーシャルワーク専門職やボランティアの研修カリキュラム開発等に、韓国では、相談援助に基づく対応プログラム作成等に貢献する。本研究の成果は、高齢者の「孤立死」を未然に防ぐうえで、援助者（ボランティアを含む）の役割とその協働の条件を明確化するものである。

成果資料目録	・村社卓（2015）「高齢者の孤立予防に関わるボランティア活動において良好な交互作用を継続できる要因と支援の特性」『社会福祉学』（査読有）に投稿（2015.1.31締切）現在査読中。 ・出井涼介・三原鉄平・實金栄・桐野匡史・中嶋和夫・村社卓（2015）「在宅高齢者の地域生活環境状態と地域生活環境満足度の関係」『社会福祉学』（査読有）56(1)に掲載予定。